

Humanities, University of Toronto, Ontario.

McKinnon, A. (1989). Mapping the dimensions of a literary corpus, *Literary and Linguistic Computing*, 4, 73-84.

McKinnon, A. and Hogue, S. (1987). Uforanderlige and uforanderlighed: more about their differences, *Literary and Linguistic Computing*, 2, 98-107.

Kahn, A.H. (1982). *Lidenskab in Efterskrift*. in *Kierkegaard, Resources and Results* (edited and with an introduction by Alastair McKinnon), 105-118.

Kahn, A.H. (1985). *Salighed as Happiness? Kierkegaard on the Concept Salighed*, Wilfrid Laurier University Press, Ontario.

日蓮遺文の計量分析

— 思想の変化と文体の変化 —

統計数理研究所 村上 征勝・岸野 洋久*
立正大学 仏教学部 伊藤 瑞叡

報告者達は、この数年、鎌倉時代の宗教家日蓮の著作、弟子の著作等を用いた日本語文献の計量分析を試みている。今回のテーマは、日蓮の著作をもとに彼の文章に経年変化がみられるか、またみられるとしたら、それは何時頃、どのように変化したのかという問題である。

同一人物の文章の特徴には、一生変化しないものと、時とともに変化するものがある。今回は品詞の使用率を中心に、日蓮の文章において変化のない特徴は何か、変化した特徴は何かを、日蓮遺文 23 編を分析して調べた。

その結果、動詞、副詞は使用率には変化がみられなかったが、他の品詞（普通名詞、固有名詞、形式名詞、代名詞、数詞、形容動詞、助詞、接頭語、接尾語、形容詞、助動詞、連体詞、接続詞）の多くは、1265～1270年までの間に使用率に変化が生じているとの結論を得た。尚、今回の分析にあたっては漢文比率などの諸データを考慮に入れていないため、今後、それらの諸データによる修正を加えた上で、詳細な分析を試みる必要がある。

国際日本文化研究センターの梅原猛氏は「文体は思想の表現である」と述べているが、もし、そうであるならば、日蓮の文体は彼の思想が大きく変化したといわれている佐渡流罪時(1271～1274年)を境に変化がみられるはずである。佐渡流罪以前に多くの品詞の使用率に変化が起きていることは何を意味するのか、品詞の使用率にみられる文体の変化は思想の変化と関係がないのか等、日蓮遺文の計量分析を進める上での問題点を提示した。

学術文献情報の関係構造化とそのクラスタ分析

北海道大学 工学部 斉 藤 たつき

学術文献（ここではおもに研究論文をさすものとする）情報間の構造を解明し、研究に対する新しい着想や将来の研究動向を把握する活動は重要である。研究者にとって研究活動を進める上で、文献検索・サーベイ等は不可欠の作業である。学術文献集合を研究対象として、それらから客観的に観測される入力情報や抽出可能な概念情報、あるいは概念情報で構成される学術文献プロフィールの形成は大きな研究課題といえる。

* 現 東京大学海洋研究所